

第59号 50円
昭和54年 3月25日

内容

高等教育の動向	1
千人会	2
故正田先生の遺稿集出版	3
寄付金報告・寄贈図書	3
第15回大学教員懇談会	4
第101回大学共同セミナー	7
事業部だより	9
協力団体催し物案内	9
館長日記から	11
利用状況	11, 12

セミナー・ハウス

SEMINAR HOUSE NEWS

発行

財団法人 大学セミナー・ハウス
 所在地 東京都八王子市下柚木
 (〒192-03)
 電話 0426-76-8511~3
 振替口座 東京 74590番
 <東京事務所>
 東京都中央区日本橋本町3-3
 三井銀行本町支店ビル5階
 電話 東京 (241)3961
 編集・発行人 飯田宗一郎
 製作 中央公論事業出版

六〇年代の拡張政策で定員の増加していた大学に対し、応募者数の方は一九七五年頃から減少し始めた。他方、一九六四年を頂点とする第二次ベビー・ブームの終了がその間接的な影響を大学に与え始めた。学校教師の需要が頭打ちとなり、大学卒業生の失業を深刻にしつつあるのである。さらに大学卒として就職した場合でも、その見返りは以前程大きくはなくなってきた。こうして六〇年代に拡張され、縮小不可能となった大学は、これまであまり行っていない。

今日のイギリス高等教育の諸問題を論ずるにあたって、まず一つの顕著な事実を指摘しておくたい。それは、一九六九年を頂点とした学生運動の事実上の消滅である。しかもこの運動は、官僚制、非人間性、疎外といったその攻撃目標を何ら破壊することのないまま消滅してしまつたのである。学生の新しい世代は無関心に陥り、他方いぜん尖鋭な少数活動家達の間には、右傾化の傾向さえ見られるようになってきている。

学生運動は参加を目指したが、その結果はむしろ官僚制の拡大だった。教師達は参加に伴う委員会の増加分だけ行政雑務に忙殺され、他方、学生達はこうして参加にますます関心を失つてしまった。学生達の興味も、運動華やかになりし頃の社会学から、今では法律や会計学へと移ってしまった。

なかつた亜専門職者の訓練にますます力を貸さねばならなくなつた。

こうした結果生じたのは、人文科学系学問と応用部門との対立である。前者はラディカル化し、後者はこれまで低かつたその社会的評価の改善を求める。古い伝統にしっかりと根を下したオックスブリッジ等と、地方大学との格差は増大することになる。労働者階級の子弟をとつてみても、ポリテク

を吸収したが、今やそれは不可能になってきている。学生の期待と現実とのギャップは、大学卒即公務員というイメージの強かつたドイツで特に大きい。ここでは政治化と人文教養階級の士気阻喪が目立っている。人文科学系の学生達は、ナチスの台頭を防げなかつた旧世代と、新しい技術、ビジネス・エリートと共に激しく批判されている。大学は文字通り政治の場と化している。他方、政治家達は労働



ロンドン大学教授

高等教育の動向

学生参加と大学の政治化をめぐって

デイビッド・A・マーチン

ニックスマまで含めれば高等教育人口の半数は彼等が占めるけれども、大学だけをとりその割合は三分の一にまで落ちてしまう。異なる階層間の社会移動は、大学を通じてではなく、むしろ職場を通じて行われているのである。

ヨーロッパ大陸に目を転じてみよう。大学の大衆化は各国共通の現象である。五〇年代から七〇年代にかけて、学生数は一〇倍にもふくれ上っている。かつては中等学校の拡大が人文科学系の卒業生

者の民主的参加や経営管理といったモデルの導入で大学の混乱を解決しようとして、混乱を一層深めている。大学の自立は、学生達と政治家達の両面から脅かされているのである。

イタリアでの学生運動は終る所を知らない。イタリア経済の奇跡的成長は学生達の期待を大きくふくらませておきながら、それを満たすまでには持続しなかつた。大学教育に進行したマスプロ化は、社会の一般的混乱と相まって、巨大

な規模の政治化を引き起こした。大学卒業の価値は無残なまでに低下し、単に職がないという失業を越えて、就業不能という状況さえもたらしつつある。

このような事実から何がいわれうるか。大学はひとつたび巨大化すると同制しえなくなる、ということである。ところで、大学入学資格の取得以降は学生の選抜のなされないフランス、ドイツ、イタリアでは、大学は巨大化しやすいため、その内容はちがっていても、アメリカとイギリスは共に学生の選抜を行っている。ヨーロッパ大陸では人文科学系学生の過多とそのラディカル化がいぜん続いているのに対し、アメリカとイギリスでは学生運動は今や消滅しつつあるが、その原因は選抜の有無に求められそうである。

大学の自治をとつても、イギリスではかなり安定しているが、ドイツでは苦境におかれている。ドイツの大学は活動的少数派学生によって牛耳られてしまつている。他方、その弱みにつけ込んで、政府は大学に強い圧力を加えてくる。二つの力の板ばさみになって、大学の自治は脅かされてしまふのだ。この点、参加学生代表数を、投票の労をとつた学生数の比に応じて制限するというフランスの大学の方式は、注目にあたいするといえよう。

(第15回大学教員懇談会の講演より、文責・編集者)

千人会

昭和53年12月〜54年1月現在

◆現在、会員は一、五五三名です

大学人 一、一七七名
社会人 三、七六名

◆新しく会員となられた方々

9名〔第46回報告(申込順)〕
電気通信大学短大教授 佐藤 公子殿

B 東京工業大学教授 谷口 雅男殿

C 当ハウス職員 佐々木郁郎殿
主婦 佐々木収子殿

C 荒川水力電気㈱社長 中岡 保殿

C 主婦 大野佐喜子殿
主婦 伊藤 一江殿

A 横浜市立大学教授 相原 光殿

B オリピック記念青少年総合センター調査広報課長 中野スミ子殿

◆会費ありがとうございます

53年12月〜54年1月(敬称略)

大地羊三、高橋節子、笠井貴征、石橋秀雄、奥繁光、茂木誠陸、安藤瑞夫、岡本繁雄、金田品二、伯東剛、佐藤公子、高野雄一、外池孝雄、若林俊輔、大谷慎之介、池川郁子、齋藤忠利、西巻正郎、薄衣佐吉、柴田菊代、手塚富雄、飯島宗享、祖父江孝男、井上達雄、高橋浩爾、宮本勉、田村光三、山田暁、茅伊登子、慶伊富長、市川勝洋、伊藤文人、大倉謙一、和田木松太郎、平松幸一、横沼健雄、池田貞雄、大内英吾、大頭仁、田内幸一、竹内啓一、三井為友、関嘉

彦、池田温、佐島秀夫、半谷高久、清水誠、竹村研一、有山正孝、西田亀久夫、小穴純、岡崎正、塚本利明、沢孝一郎、大須賀節雄、杉山吉茂、山下孝夫、吉永フミ、関口実、来正三、浮田久子、清水英夫、笠原正成、大川信明、谷口雅男、木村敏美、安味貞正、宮田登、内藤正、宮川松男、辻誠、佐々木邦彦、築地整、三戸公、石田孝夫、宮部直、小西正捷、岩尾裕純、濱川祥枝、加藤晴久、吉田光孝、飯田能子、深本孝久、中野卓、川鍋正敏、杉山好、石井不二雄、三浦永光、三浦安子、隈部直光、伊藤満、後藤總一、江藤淳、玉田啓八、湯浅光朝、市川孝正、田中悦子、天野成光、川端香男里、平島正喜、大口勇次郎、伊藤学、沼田滋夫、青柳總太郎、山本満、桑原哲郎、山鹿誠次、清水啓三郎、高山利勝、山田圭一、川喜二郎、末永国明、大塩俊介、高木亀一、東季彦、三宅義夫、岩永達郎、福原満洲雄、田中昭二、赤松秀雄、森山俊雄、佐藤進、森岡敬一郎、中尾信之、米川哲夫、高橋恒一郎、大橋万知江、野中虎雄、住田友文、遠藤健治郎、東川清一、福本日陽、岩崎代志治、小林甫、高橋正男、大羽滋、小山弘志、増田武男、渡辺忠胤、石井明、升本喜兵衛、上田明子、古田正美、石田龍次郎、瀬野信子、中鉢正美、深沢実、齋藤信房、川本茂雄、上山碩、増地昭男、久保田端郎、天野都夫、鈴木博、森田豊夫、齋藤耕二、示村悦二郎、伊藤洋、若林貞雄、伊藤修、中富光国、品川孝次、木村康雄、川崎正三、勝田有恒、高村新一、武藤義夫、田中英夫、喜多村

和之、園田義道、秋山慶、篠崎武、柳沢富雄、師岡孝次、高橋源次、佐々木郁郎、小俣武夫、瀬川渡、新井明、谷口修、慶谷寿信、村上泰治、田上穰治、石塚可農夫、根岸愛子、佐久間純郎、鐘ヶ江信光、乾崇夫、北原文雄、蓮見音彦、司馬正次、河田敬義、松元三郎、本田和子、加倉井茂樹、飯田宗一郎、武田昌輔、高橋昭三、近藤圭一、光延明洋、池井優、朝倉孝吉、大原恭子、中山知雄、猪瀬博、遠藤一郎、西勝、鈴木皇、打田峻一、刈田元司、永積昭、原増司、永島孝、清水良三、小林清子、原正彦、磯野修、有賀喜左エ門、川喜田愛郎、松原元一、上谷琢之、関口晃、良知力、矢澤修次郎、岩木ミチ、宮崎七重、佐々木収子

◆会費に添えられた言葉を拾う

大学セミナー・ハウスの着実な発展を心からよるごとと共に、おいおい広く社会的注目も加わってきたことを心強く感じます。
東京大学助教授 池田 温

12月で六九歳になります。七〇歳定年制なので、54年度いっっぱい現役です。相変わらず元気です。
早稲田大学教授 佐島秀夫

今年の誕生日がなんとか無事迎えられそうに感謝しています。肺をいたため半年の入院を終了し、退院。目下療養して早く元氣になりたいと願っています。
都立白鷗高校教諭 岡崎 正

館長の御健康とお元氣をお祈りします。
共立女子大学教授 手塚富雄

一年がたちまち過ぎる感あり、セミナー・ハウスはその一年ごとにまだまだめざましい成長ぶりで大慶。
東京大学教授 飯島宗享

ますます充実されたセミナー・ハウスの運営を心からおよろこび致しております。過日はテレビにて飯田先生のお健やかな御姿を拝見いたしました。
東京工業大学教授 慶伊富長

飯田様、セミナー・ハウスからの読みやすい印刷物を通して、拡充の程をうかがっております。除夜の鐘の音から、また新しい構想を期待しています。ご健康にご留意下さい。東京キリスト教青年会 宮部 直

ごぶさたしておりますが、セミナー・ハウス・ニュースで、ハウス健在の報をうれしく読んでいます。今年も一つ馬齢を重ね、貧者の一燈を献じます。主の御名に栄光あれ。
東京大学助教授 杉山 好

国際セミナー館の開設おめでとうございます。
立教大学教授 川鍋正敏

二七回目の誕生日を楽しく健康にむかえます。セミナー・ハウスのますますのご発展を心よりお祝い申し上げます。
主婦の友社勤務 青柳総太郎

セミナー・ハウスの歩みにあやかって、私の生活も地についたものであるように心がけたいと思います。館長および館員の皆さんの

ご健康を祈ります。
法政大学教授 山本 満

雑事から解放されてセミナー・ハウスをゆっくり利用できる日のあるのを心待ちにしています。
立教女学院短大教授 村上泰治

長年お世話になった東大もあと一年で卒業です。大学セミナー・ハウスのご発展を祈ります。
東京大学教授 乾 崇夫

貴大学セミナー・ハウスにならって、私共の大学でも(ミニ)セミナー・ハウスができました。飯田スピリットが伝播してゆきます。
東京理科大学教授 北原文雄

早稲田の学生たちとセミナー・ハウスのお世話になり、千人会へ入れていただいていたから一〇年の日が経ちます。私もおかげ様で元気で七七歳の誕生日を迎えることができました。その間、毎年皆様からお祝いのご言葉をいただいたことをありがたく思っております。僅かばかりですが、喜寿の祝のしるしまでにお受取り下さい。
弁護士 原 増司

二年ほどドイツに行っておりまして失礼いたしました。二年分お送りします。
明治学院大学教授 西 勝

僅かですが、お役に立てば幸いです。意義深いご事業の一層の発展を祈ります。
電気通信大学教授 遠藤一郎

『正田建次郎先生』エッセイと思い出
記念出版する

故正田先生の遺稿集と追憶集を合わせて

編纂委員会 大阪大学理学部数学教室

代表世話人 永尾 汎

正田建次郎先生のご急逝は、多くの人を驚かせ、悲しませ、そして痛惜の感を深くさせた。昭和52年3月20日、旅先きの足利赤十字病院にご入院、そしてご逝去。先生は七五歳であった。

先生は大数学者、大阪大学学長、武蔵大学学長、文部省の大学院問題懇談会の座長、日本学士院第二部長であられたことなどを拾い上げただけでも、当代一流の人物であった。加えるに陶器づくりは至芸というべく、その風格は多弁でないが、温容にかつ偉容があった。

交友、弟子達が先生をしのぶよすがとする記念出版物を望むのは当然のことなのである。

この遺稿集は専門の数学教育論あり、また専門外のエッセイあり、そして追悼文は、関西、関東の人に及び、学者から財界人に亘っている。先生の教えをうけた門下生が最も縁が深いのであろうが寄稿者のすべての人が先生との出会いを人生の幸せとして、その機縁に感謝している。私のごときはまったくの末端に連なる者であるが、昭和49年2月から財団法人大学セミナー・ハウス理事長であられたことよって、身近かにこの大人物に接し得たわけである。人生における大きな幸運であった。

この中にある山内恭彦、永井道雄両先生の追悼文は、当セミナー・ハウスのとしても拝読しなればならぬ。写真のお顔はどれもよい。作品の陶器の壺も茶器も皿も雅品である。五九三ページの大きさは、この先生の人となりの大きさである。(館長記)

- △視聴覚施設設備充実募金▽
- 10,000円 津田塾大学教授 馬場 伸也殿
- 10,000円 東京大学教授 伊藤 正己殿
- 10,000円 東京大学教授 大森 莊蔵殿
- 10,000円 普通土学園 原 順一郎殿
- 10,000円 東京理科大学理工学部物理学科 大沢研究室殿
- 10,000円 東邦大学 吉田 光孝殿

●寄付金品報告

53年12月～54年1月

△支援を感謝して拝受いたしました。

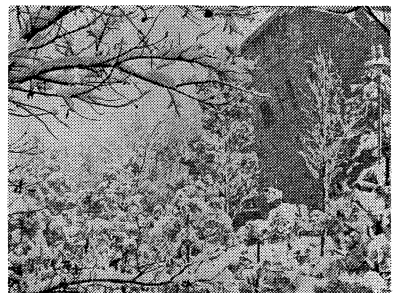
△植樹基金▽

6,000円 東邦大学 生理科学ゼミ殿

- △53年7月～10月
- 寄贈図書
- 「不確定時代の選択」西川 潤殿
- 「国際連合論序説別冊」斎藤鎮男殿
- 「環境と文化」東ノ科学振興会殿
- 「神と人間」「青年と読書」「フアースト」「社会運動とキリスト教」「日本新教百年の歩み」「人間と歴史」
- 「科学と人間と信仰」「参加と抵抗」「基督者学生運動史」高倉正治氏
- 「大学論集」第6集 廣島大学教育学研究センター殿
- 「金融経済」一六九～一七一 金融経済研究所殿
- 「税法の基本原理」北野弘久殿
- 「会報」第34号 アメリカ研究振興会殿
- 「Asian Culture」No. 19～20 Let's Play Asian Children's Games
- ユネスコ・アジア文化センター殿
- 「佐渡叢書」第12巻 松井源吾殿
- 「早稲田法学」第53巻1・2号

- 「人文論集」第15号「早稲田法学会誌」第28巻 早稲田大学法学会
- 「出稼き労働と農村の生活」羽田 新殿
- 「井伏鱒二」熊谷 孝殿
- 「現代キリスト教倫理」宮田光雄殿
- 「採集と飼育」7～10月号 日本科学協会殿
- 「社会学論叢」No. 72 「家族の社会学」「人と日本」9月号「中央公論」10月号 笠原正成殿
- 「シューベルト―友人たちの回想」石井不二雄殿
- 「脱走兵と動乱の満州」松島正治殿
- 「若き日の自画像」小島善太郎殿
- 「国際交流」No. 17 「年報53年度」国際交流基金版
- 「PEACE RESEARCH IN JAPAN 1977-78」
- 日本平和研究懇談会事務局殿
- 「北京・新疆紀行」山本 満殿
- 「美術の歩み」上・下 友部 直殿
- 「英文学概論」Samuel Johnson」Essays in Cultural Criticism」高橋源次殿
- 「国際協力」8～9月号 国際協力事業団殿
- 「英語展望」No. 53, 56, 61 EL E C C殿
- 「社会学入門」有斐閣編集部殿
- 「現代ギター」9月号 現代ギター社編集部殿
- 「学校相談心理学」日本思想史講座「別巻2」「教育心理」3～11月号 神保信一殿
- 「口述の生活史」中野 卓殿
- 「国際適応訓練マニュアル」金山宣夫殿
- 「早稲田フォーラム」No. 22 早稲田大学広報課殿
- 「日本外交史」大畑篤四郎殿
- 「スクリーン・イングリッシュ」10

- 「映画のなかの青春像」荒井良雄殿
- 「宇宙の終焉」杉本大一郎殿
- 「BAREFOOT GEN」飯田能子殿
- 「人間と文化」野田春彦殿
- 「現代技術と社会」「科学のライフサイクル」山田圭一殿
- 「機械の現象学」「現代科学をどうとらえるか」坂本賢三殿
- 「学びの原点く」尾形 憲殿
- 「紀要」I アメリカ・カナダ 11大学連合日本研究センター殿
- 「歴史と未来」第5号 中嶋嶺雄研究室殿
- 「研究報告」第42～44号「第20回研究発表講演会要旨」工学院大学図書館殿
- 「聖書」「聖書ガイドブック」知野見敏朗殿
- 「公法理論」1～4号 斎藤 寿殿
- 「現代詩研究」二九〇 現代詩研究所殿
- 「内外大学関係情報資料」5 大学基準協会殿
- 「技連」No. 24 法政大学技術連盟殿
- 「現代の社会問題と法」唄孝一殿
- 「続アジアとの対話」板垣興一殿



春雪の中に本館を見る

二つのプログラムが合流した記念行事

第15回大学教員懇談会

大学共同セミナー一〇〇回記念・大学教員懇談会15回記念

主題 今日の大衆教育の問題点

期日 昭和53年12月15、17日

講演

①大学の現状と将来

朝日新聞客員論説委員

永井道雄氏

②高等教育の動向

ロンドン大学教授

デイビッド・A・マーチン氏

シンポジウム

問題提起―回顧と展望―

△総括発題者▽

国立教育研究所長 木田 宏氏

△発題者▽

A 総合大学と単科大学

東京大学教授 伊藤正己氏

【単科大学】

国際基督教大学教授 斎藤和明氏
B 大学の設置基準と教員の資格
認定 大学基準協会前副会長
安藤良雄氏

C 学部と大学院

【学部】
東京大学教授 大森莊蔵氏

【大学院】

筑波大学教授 司馬正次氏
D 大学共同セミナー一〇〇回を
ふり返って―転換期の大学におけ
る役割―

聖心女子大学教授 岡 宏子氏
成城大学教授 野口武徳氏

△全体討議ゲスト▽
立教大学総長 尾形典男氏

日本私学振興財団理事長
佐藤 朗氏

日本学術振興会監事
岡村総吾氏

朝日新聞論説委員
松山幸雄氏

△世話人▽
東京大学名誉教授 前田護郎氏
(代表)

筑波大学教授 井門富二夫氏

聖心女子大学教授 岡 宏子氏

電気通信大学教授 井早康正氏

東洋大学教授 大川信明氏

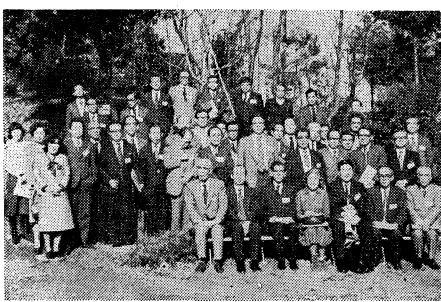
早稲田大学教授 柏崎利之輔氏

成蹊大学教授 宇野重昭氏

国際基督教大学教授 原一雄氏

津田塾大学教授 馬場伸也氏

東京女子大学教授 遠藤真二氏



3日間の討議を終えて

△参加者▽63名(うち女子6名)
ICU(5)、東大(4)、電通大、中
大、東京理科大学、立大、早大(各3)、
筑波大、東外大、東工大、一橋大、
慶大、芝浦工大、津田塾大、東女大、
日大、日女大、法大、ロンドン大(各
2)、横浜国大、学習院大、上智大、
成蹊大、成城大、聖心女大、東京理
科大、東洋大、武蔵工大(各1)、計
28校。朝日新聞(2)、日本学術振興
会、日本私学振興財団、大学基準協
会、国立教育研究所(各1)

(注) 発題者、世話人を含む

大学教員懇談会は、そもそも昭
和45年9月、「日本における大学
改革の反省と展望」をテーマに開
催された懇談会を契機に発足した
ものである。当ハウスの継続的な
活動として今日まで、大学が当面
している様々な課題を取り上げな
がら実施されてきており、大学間
は言うに及ばず、大学と社会をつ
なぐコミュニケーションの場とし
ての役割を担ってきたが、いま九
年の歩みを経て通算一五回目を迎
えることになった。

◇◇◇

当ハウスは、年度当初から、大
学共同セミナー一〇〇回記念の行
事の一貫として、一〇〇回の総括
と大学教員懇談会の成果をドッキ
ングさせる方向で第一五回の意義
を探ってきた。共同セミナーの成
果を裏づけたのは、あくまで参加
した学生個人個人の自覚化された
体験の重みであって、大学教育の
制度論の中で捉えられる性格では
ない。言いかえれば、「学問や教
師との出会い」は、一〇〇回のデ
ータを分析することで探れるもの
ではないだろう。しかしながら、

「転換期にある」ことを自覚し、
内容自体も変わり始めた高等教育
の中で、大学共同セミナーは新た
な飛躍と展開が望まれている。当
ハウスの活動と今日の大学のあり
方とを総合的に見直してみるこ
とこそ一〇〇回と一五回を記念す
るにふさわしい試みであろう。

◇◇◇

今回は以上の主旨で、大学共同
セミナーと大学教員懇談会の双方
の関係者の中から世話人を求め、
法人の要請に快く応じて下さった
一名の方々の出席の下に、9月
12日、企画準備会が私学会館でも
たれた。さらに、10月23日の世話
人会で検討の結果、別記のような
陣容と内容で開催の運びとなった
のである。

発題者には、ゲストというより
「セミナー・ハウスの仲間」と自
称される永井道雄氏をはじめ、何
らかのかたちで当ハウスのプログ
ラムに企画・協力された先生方が
多く、いずれも主旨に深い理解を
示して参加して下さったのは幸せ
であった。折りしも、社会学者と
して著名なロンドン大学教授D・
A・マーチン氏が来日中であり、
井門富二夫氏のお骨折りで、マー
チン氏とご家族を当ハウスにお
迎えすることができたのも大変
うれしいことであった。

り、60年代の高度成長期に著しく
増大した学生数のほとんどが私学
に吸収される結果となった。しか
し、60年代の日本には、政党や各
種の団体を問わず、大学に関する
長期総合計画が皆無であった。最
も大きな歪みが出たのが私立医科
大学で、入学寄付金の問題は教育
界のモラル低下につながっていつ
た。このような状況に対処して一
九七五年に私学振興助成法が制定
され、水増し入学が抑制されるよ
うになったが、学校屋のたぐいの
私学の増加によって、以前から存
在した国公立大学が現状維持にも
かわらず、相対的に上がっていく
のは当然の成りゆきであった。
次に、D・マーチン氏はイギリ
スを中心として欧米の高等教育の
動向を述べられた(要旨は1ペー
ジ参照)。

◇◇◇

二日目の午前中に行われたシン
ポジウムは、まず総括発題者に今
日の大学と大学院にからまる問題
点を具体的に各々が提出しても
らい、それに基づいて四つにまと
められた論点に立って、それぞれ
の発題者から問題提起がなされ
た。

総括発題者の木田宏氏は、日本
の大学の特質を、①戦後、一貫し
て量的に拡大していること、②国
公私立の学生数のアンバランス(八
三・五%が私学)、③進学率や大
学の配置にみる地域差(大都市集
中)、④専門領域の片寄り(国立
は人文社会系二〇%、理工系四
〇、医歯系五・五、教育二六に対
して私立はそれぞれ六四、二五、
一・八、三・六)、⑤学部学生に
対する大学院生の比率が極めて低

いこと(アメリカ一五%、日本三%、⑥外国人留学生が少ない(五七〇〇人)、⑦安上がりな大学教育(GNPに占める大学教育の総経費〇・八%、イギリス一・一、ドイツ一・九)として、これまでなされてきた施策—大学設置基準の改正、大学院設置基準の制定、大学の施設や新しい学部の設置、大学院の改革、共通一次、私学助成など—を概括されてから、最後に今後の政策的課題として次の諸点をあげられた。①地方における高等教育の拡大、②大学院の整備、③放送大学の創設、④国際化の推進、⑤研究体制の整備。

つづいて行われた四つの分科会の発題者による問題提起を拾ってみると次のようである。

【総合大学】総合大学のメリットとして、各専門分野間の交流・協力が容易であること、学際領域の開拓や推進に有利であること、学問の体系や学説に他の学部の批判を受けることができること、卒業生が社会の各層において、援助や助言を受けることができること等々を指摘できるが、今日では単位互換制度、共同利用機関の整備、学際学会の誕生、大学間交流の活性化などがあって、実質的には総合大学でなくても解決できる。むしろ、総合大学の現状は学部の壁が非常に厚く、聴講も体系化されておらず、財政の面でも学部ごとに固まっている。単科大学に対しては複科大学、あるいは複合大学ぐらいいかなどではないか。

【単科大学】単科大学のメリットを一言で言えば、老舗でしか手に入らないような良質の教育や研究がなされることであるが、下手を

すると地方の雑貨屋のようになる恐れがある。一般に単科大学は専門学校から昇格したものが多く、ICUのように liberal arts college である場合は少ないが、学科の単科大学化に共通して必要なものがあるとすれば、ICUで行われている教育から生まれる「二つの分野は狭いものであるから、交流しなはいけない」という意識ではないか。

【大学の設置基準】文部省の認可によらずに大学人を中心として作られた設置基準があるべきであるという戦後のアメリカ視察団の助言によって、大学基準協会は設立された。その後、別に文部省の機関として大学設置審議会ができた。これが今日の大学設置審議会となった。大学基準協会とは accreditation の訳であるが、chartering がこれに複合されて維持されているアメリカの場合と異なり、必ずしも十分ではない。しかしこの accreditation の主旨にそって、文部省令で定められた基準より高い水準を定めている。

一〇余年間、基準協会や審議会の双方に関係してきて感じることは、日本人はお上が決めたことはいやいやながらも従うが、自分達で決めたことには極めて無関心だということである。

【学部】学生の年齢の幅が拡大し、大学以外の社会との交流が濃くなって現在の大学は、もはやかつての城壁をかまえた大学ではなく、社会という川の流れの一部分である。そのような大学が何ほどかの意味を持つとすれば、学問がその核心となっているからではないか。学問の雰囲気がかかる

じて大学を支えているのであるなら、この流れの中で教育と研究の分離は適切ではなく、学部と大学院の連続性を維持すべきではないか。

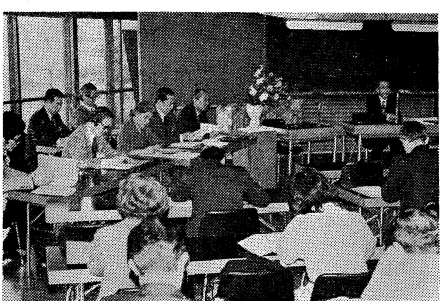
【大学院】修士者の就職状況が悪く、全体的に研究者養成に傾き、社会的視野が欠如していることが問題である。大学院に対する大学教官の意識を、筑波大学で実施したアンケート調査でみるに次のようである。全体の四分の三が大学院にウェイトを置いた大学を希望し、大学院の特色をどの点に出したいと思うか、という問いに対して、高度な専門的職業人と答えた者は四〇%、高度な学問的人材が六〇%となっているが、他の大学では後者が圧倒的に多くなることが予想される。なお面白いことは、教官の経歴によって、アカデミック志向とプロフェSSIONナル志向との差があることがわかった(他の大学から筑波に移行した者は前者、企業や研究所から来た者は後者、教育大から移行したものは中間)。

社会のニーズに適応した大学院として試みられている筑波大学の研究科で現在認識されている問題は、社会人受入れや広域カリキュラムに対する入試や教育の方法、社会の認識不足からくる職場の処遇、プロフェSSIONナル・ドクターの必要性などである。

【大学共同セミナー】〇〇回をふり返って参加学生の反応に顕著に見られるのは、①学問とは何かというところがわかった、②先生方が自分の専門をぶつけ、人間的な顔をしてくれる、③日頃の大学では得られないフィード・バック

が可能である、という感想である。これらを集約すると、自ら学ぶ姿勢と、高度なものが与えられることが見事にフィード・バックされていることがわかる。

本来、一般教育は広い視野の中で一つの専門に入っていくことを狙いとしているが、制度面はともかくとして、効果を發揮してないことが多い。その点、学際セミナーは、各領域に一流の専門家がいて、専門的な視野を一般的レベルで学際的にぶつけてくれるので、専門と学際的視野とのフィード・バックが可能になっている。加えて学問の極端な細分化が進んでいる現状では一つの大学でまかない切れない専門分野があり、新しい知識や考え方がここで得られるし、学生も先生も大学の垣根を越えることができる。これらのことが一緒になって、学生の中にいわば知的な興奮が起るのである。共同セミナーは知的起爆剤としての役割を十分に果たしているといえよう。



シボジウムの木田宏氏(右)と発題者諸氏

以上の発題をふまえて、参加者は希望する分科会に入り、三時のお茶の時間をはさんで活発な話し合いを行なった。夜はそれぞれの分科会の司会者より討論の報告がなされた。

最終日には四名のゲストを迎え全体の討論を行った。尾形典男氏は、厳しい財政の中では、カリキュラムの多元的拡散をさせ、今一度、一般教育と専門教育を捉え直して、力点を置き方や組み合わせ方に特色を出す以外に私学の生きる道はないと主張された。また佐藤朔氏からは、私学助成の推移と、私学振興財団が行っている貸付金や研究振興基金などについての実態報告がなされた。

一方、岡村総吾氏は、今後の日本における学術研究は、外国の真似ではなく、創造的な仕事をする人材の養成が急務であり、そのためには学部教育を「五学期制」にしてはどうか、との提案を出された。今回、ただ一人、大学以外から参加された松山幸雄氏は、ニューヨークとワシントンでの一〇年間におわたる特派員生活の体験の中から、国際的に通用する人材の養成に、日本の大学教育は何ら有効ではない現実を鋭く指摘された。

◆◆◆
今回の懇談会は久方ぶりに二泊三日の日程で行われ、常に人の集うところ将来への展望を求める議論があり、楽しい交流があった。その幕を閉じた。とりわけ夜の懇親会や三時のお茶に交友館がそのサロンの特色をいかに発揮したこともプログラムの成功に力があつた。施設面の充実を併せて喜びた

いと思う。
最後に、企画の当初からICU教授原一雄氏の温い助言があったこと、広島大学助教喜多村和之氏、名古屋大学助教天野郁夫氏

▼教育スペシャリストとしての研修の機会を

日本大学商学部教授 水島 義治

かねがね是非訪れる機会あれかしと願っていた大学セミナー・ハウスにおける第一五回大学教員懇談会に出席する機会を得て、二泊三日にわたる討議に参加できたことは、ほんとうに嬉しく且つ有意であった。主催者側の企画と運営は実に見事というべく、至るところに細やかな心配りが感じられた。参加者全員が大学人としての明日への営みの火をかきたてて帰ることができたのは、職員の方々をも含めた主催者の御苦労によるものであることをしみじみと感じる。

交友館における夜の9時から11時半までの懇親会はまさしく友情を育むための恰好な場であった。私は第一日の夜はI教授と、第二日目の夜はY氏と特に親しく語り合うことができた。某国立大学のI氏は学生部長の経験を持つ老練で、実に謙虚で温かい人柄に私はひかれた。私たちは第二日目、三日目の全体会議には並んで坐った。Y氏は四〇に満たない少壮俊英で、分科会での発言も光っていたが、何よりも大学人としての自負と教育と研究の情熱が好ましくさわやかなものに感じられた。交友館とはまさしく言い得て妙である。
二日目の夕食はゲストのロンドン大学のマーチン教授とその御家

を加えて、真夏の一夜、新築なった国際セミナー館で、共同セミナー一〇〇回の分析や評価に関しての話合いが持たれたことをつけ加えておきたい。

族、そして広い食堂を埋めた各大学のゼミの学生たちと一緒にだったが、マーチン教授の令嬢のピアノ独奏、中国と韓国の留学生の歌など、和氣藹藹、国際色豊かな楽しい一時であった。私はこの夜をいつまでも忘れることができないであろう。
さて白熱した討議の中で私の感じたことを一つ二つ。①苦悶して

▼フォーロー・アップを

学習院大学理学部教授 木下 是雄

大学教員懇談会にはじめて出席してみる気になったのは、日本の大学はどうなるのか、どうなるべきなのか、思い迷うことが多いからである。

大学生が同年齢層の三八%を占めるに至ったという。必然的にその知的能力のスペクトルは下に向かってひろがる。かりに全員に同質の教育をするとすれば水準を下げる以外に道はない。それでいいのか？

対策としていろいろの水準の課程を準備するという手段があるが、かざられた予算・施設でそれを実現できるか？ かりにそれができたとしても、学生の側に自分自身の学習体系をつくる能力があるか？

いる大学、その苦悶の実態を明らかにし、その要因を考えて、一つ一つ具体的方策をたてるべきなのになぜに我々はそれをしないのか。もつともつと実際の・具体的な問題がある筈だ。②研究者がそのままりっぱな教育者であるという錯覚もしくは無意識の傲慢さが我々を毒していないか。教育スペシャリストとしての自覚と、それに必要な研修をなぜに我々大学人は求めないのか。怠慢な学生と妥協すべきではない。しかし傲慢であってはいけない。研究者としての研鑽は勿論必要である。しかし同時に教育者の研修を忘れてはならないではあるまいか。特に大衆化は。

私も三〇%を大学生にするのが彼らにとって仕合せなことなのか？ 大学の外にこそ生甲斐のある生活をみつけることのできる人も多いのではないか？

私にこういうことを考えさせるきっかけを作ったのは、研究者養成のための教育が無視されている現状に対する危機感である。数学や物理の世界では、いちばんブロードタイプなのは二〇歳代だ。研究者教育は大学院でなどというのはよその世界の話で、ここでは大学一年からはじめたのもまだおそすぎるのである。

大学生の数が増せば大学教育の性格が変わることは避けられない。しかし、その一隅に研究者養成のためのコースを残せないようでは、大学は自滅のほかなかりう……。

こんどの懇談会で同憂の士を何人か見出したのは心強かった。しかし、それは心情の面の話で、対策の面で進歩があったわけではな

▼「今日の大学教育の問題点」に参加して

東京工業大学教授 谷口 雅男

最近、一、二年に一度ぐらいは、自然とセミナー・ハウスの集会(会場として使わせていただいたことも含めて)に出るようになった。その度に施設の拡充が進み、しかしそれらが木立の間に見えかくれて、少しも目立たないところが大きい気に入っている。

さて、表題のようなテーマで、十人の人に論文を書かせたら、まさに十人十色の答が返ってくるであろう。そのようなテーマで集まりがもたれるということ、あまり期待をたずに参加させていだいたというのが正直なところであった。結論を急ぐようであるが、三日目が終わろうとして、最後に岡先生の名司会による全体討議が終ってホッとした時の感想は、終始一貫よくもこれだけの情報提供と討論をしていただいたものだという感心と企画者・講師に対する感謝であった。しかしこの事

と、私が求めている答が返ってきたかどうかは全く別の問題であって、率直に申上げて答は見出し得べくもないようであった。どなたかが言うておられたが、老舗の品を売るような、我こそは単科大学と思っている国立理工系

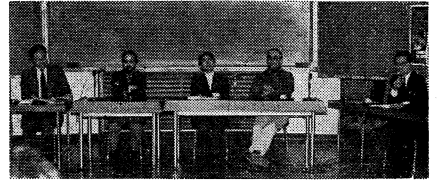
い。司会者もいわれたとおり、こんどの会は展望と問題発掘のための会、別のいい方をすれば腹にたまった思いを吐きだし合う会だったのでらう。問題を整理し、具体的にフォーロー・アップする機会を期待する。

の、それも大学院指向の水しか知らずに二十有余年を過ごしている小生にとって、本質的に理解できないお話が少なくなかった。勿論、個々の色々の事情が理解できないということではないが、そこでフッと感じたことは、少なくとも自分は大学人ではない何か別の集団に属する人間なのではないかという不安感であった。表現が不適當であろうが、「大学」というテーマを考えて見たことの少なかつた自分は無責任者だったのだからかと、反省もし、啓蒙されたと感じる次第であった。

おわりに、「化」学に基礎・応用・エンジニアリングの体系があり、現実には化学製品が世に送り出されているように、「大学」学にも基礎(原理・原則・範囲規準)・応用(多様な要求を可能にする幅のようなもの)・エンジニアリング(実際化)のような体系があって、これをふまえて卒業生という製品(失礼)を世に送り出し、社会・環境に役に立つものとして定着し、時の政治(政府?)をリードする可能性が本来的に有るのか否か、私に答は見出しえない。

第101回 大学共同セミナー

主題—映画表現と人間 —チャップリンと 20世紀文明—



右から山岸、白井、荒井、品田、宮下の諸氏

期日—昭和53年11月24~26日

△ゲスト講演V
私とチャップリン

映画評論家 淀川長治氏

△映画V
「モダン・タイムス」(Modern Times)

東和プロモーション提供
△セクション演習V

A 自伝にみるチャップリンの人間性

B 学習院大学教授 荒井良雄氏

喜劇映画作家チャップリンとチャップリン喜劇の特色について

C 映画評論家 品田雄吉氏

チャップリン神格化の否定—彼を神様にしてはいけない—

D 映画評論家 白井佳夫氏

文明批評としての笑い—演劇史における喜劇の伝統と笑いの力

△慶応義塾大学教授 宮下啓三氏

△慶応義塾大学教授 荒井良雄氏
△慶応義塾大学教授 山岸 健氏
△参加学生V77名(内女子26)
早大(13)、慶大(7)、東外大(5)、

荒井氏は、英文学研究に映像表現を取り入れ、フィルム・ライブラリーを自宅に持つておられるほどの収集家でもあり、また、ゼミ合宿では、学生の英語劇や暗誦をフィルムに収める映画マニアでもあられる。新しいスタートを切った大学共同セミナー—一回にふさわしい内容をとの意気込みで、運営委員のお二人が企画に当たられたお蔭で、別記のように極めて斬新な構成と陣容によるセミナーが実現した。

提案者の意図に即して練り上げた結果、映画史上に不動の地位を占めているチャップリンと彼の作品を貫く文明批評と人間愛が中心のテーマに置かれることになったが、「映画表現と人間」という大きなテーマを掲げることによって、今後、映画セミナーとして様々な方向に展開させていく、という可能性が十分に意識されていることは言うまでもない。

二日目の午後には、今回のメインイベントとも言える淀川長治氏のゲスト講演が行われた。このプログラムの「講演と映画の会」として、千人会員や地元の支援者等に一般公開されたため、家族連れの先生方の顔ぶれも、二、三会場に見られた。

東大、津田塾大、立教大(各4)、横浜国大、中大、東経大(各3)、一橋大、国学院大、聖心女大、専修大、法大、明大(各2)、筑波大、東京医歯大、東工大、お茶の水女大、京大、青学大、学習院大、駒澤大、芝浦工大、上智大、成城大、日本女子大、文教大、武蔵大、学習院女子短大、駒澤短大、東経大短大(各1)、その他2(32校)

「映画セミナー」が共同セミナー—100回の歴史の中に入っていない—というの、不思議といえは不思議なことである。「映画論と近代文明論」というテーマが共同セミナー委員会の席上で取り上げられたのは、昭和53年7月のことであった。運営委員には提案者の山岸健氏に加えて、折りから部の内記録映画プロジェクト・チームのアドヴァイザーとしてご指導を仰いでいた荒井良雄氏に白羽の矢を立て、さっそく映画セミナー—具体化に向かって運営委員会が発足することになった。

プログラムの指導教授によるセッションで開始した。このセミナーに期待するもの、演習の方向づけがそれぞれ述べられたあと、映画との出会い、映画と私生活との関係、そして最後に幕開けのプログラムの因んで、「心に残る映画のファースト・シーン」が語られるに及んで、早くもセミナーは熱気を帯びてきた。

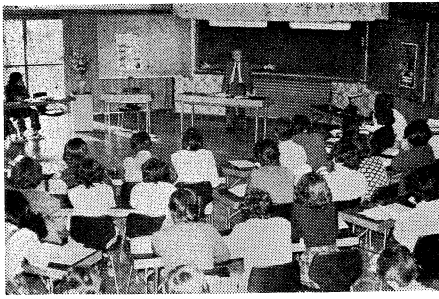
私とチャップリンとの出会いは高二の夏に「ビバ!チャップリンシリーズ」で公開された「街の燈」でした。もちろん、それ以前にも短編は何本か観てはいましたが、この「街の燈」の衝撃は私にとって決定的でした。映画館を出てから暫しボーッとしていたことを憶えております。その頃から始めたチャップリン研究。観れる限りのチャップリン映画を観て、チャップリンの「自伝」を含む研究書を読みあさり、チャップリンのポスター・灰皿・筆入れなどを集め、彼に関する新聞のスクラップブッ

夕食後、セミナーの指導者から映画解説者に変身した白井佳夫氏による解説が、テレビと同じ語り口で行われ、東和プロモーション提供の16ミリ版ニュー・プリント

このセミナーで特筆しておかなければならないのは、二日目の朝と晩の二回にわたり、荒井氏の選定による合計五本の短編映画が上映されたことである。朝はチャップリンの初期作品から「成功争い」、

「チャップリンの失恋」、晩にはそれその個性が比較できるような、チャップリンの「午前一時」、キートンの「警官騒動」、ロイドの「用心無用」が上映された。このように一時に名作を鑑賞できたことも、映画セミナーならではの醍醐味とは、参加学生の共通した感想であった。

「チャップリン馬鹿」から脱出して
吉川 彦



淀川長治氏の熱演振り(ゲスト講演)

クを作り、果ては「チャップリン」という名のつくバブや喫茶店のマツチ箱まで集めるようになってしまった私です。そんな私が今回の共同セミナーのテーマを知った時の興奮の程は察しがつくと思います。

そうこうしながら参加した三日間の共同セミナー、それは、私が今までチャップリン研究を自分なりに進めてきたことの集約となり、また大学四年間の中で最も大きなイベントの一つになったことは確かでした。セミナーに参加して得た事は数多くありますが、私にとって特に貴重だった事が二つあります。一つは、チャップリン研究をするにはチャップリン馬鹿にならなければならないということに気づいた点です。チャップリン映画を観て、チャップリンに関する本を読んでも、それでよいというわけではないのです。歴史的背景、喜劇映画史、演劇史などなど……。勉強不足を反省し、今後の勉強の課題を提供してくれた。

山の中の生活——自然と対話が出来てすばらしい。二泊三日——他人を知るには共に旅をしるというではないか。その上、今回のテーマは「映画表現と人間」という非常にユニークなものである。集まると変わった意見を持った人達がまじりあって面白い。というわけで半ば興奮状態で私は八王子に向かった。

結果はというと、プロイラーになったということである。普段大学で行われているような、一人の教授と半分眠っている聴衆ともの立場ではなく、講師の先生ともセ

とは、私にとって何よりでした。もう一つは、おそらく生涯、チャップリンについて語り合える友人を得たことです。同じ趣味を持つ大勢の友人を得ることができました。これこそが共同セミナーの持つ最も素晴らしい点ではないでしょうか。

とにかく三日間興奮の連続でした。私のチャップリン研究がこの三日間に凝縮されているようです。先輩にもセミナー・ハウスの素晴らしさ、共同セミナーの素晴らしさを伝え、今後の積極的な参加を勧めようと思っております。
(中央大学理工学部4年)

☆☆☆☆の充実感を体験して

内山 靖子

「セミナー・ハウスって山の中にあるんでしょ? キツネがでるわよ」。共同セミナーに参加する、と私がいった時に、私の悪友達が私にプレゼントしてくれた言葉である。しかし私としてはこのセミナーに非常に魅力を感じていた。

ミの仲間とも人間対人間の関係で話をする事ができたのは嬉しい。また、今回のテーマにふさわしくチャップリンが出演した初期の作品を見る事ができたのも感激であった。しかし欲をいえば、もう少し時間がほしかった。あまりに多彩なプログラムを、わずかに二泊三日というのはもったいない。消化する間もなくエサをつめ込まれパンク寸前。勿論それは、各大学へ帰ってから個人の課題なのだろうが、やはりもっとゆとり味わってみたいかったというのが本音である。

なにかブツブツ文句をいってしまつたが、感想を映画風にひとことといえは☆☆☆☆(星四つ、つまり「最高」のマーク)なのである。学問をする場、という本来の意味が失われつつある大学では味わうことの出来ない充実感を味わうのも事実なのである。私が八王子の山の中で会ったのは、キツネではなく素晴らしい人間達だったと悪友達に教えてやろうと思つた。
(成城大学文学部1年)

“常連”の新しい充実感

三輪 伸隆

大学共同セミナーに参加したのはこれが八度目という常連の私であったが、これまでどちからかといえは、学問的色彩の濃いセミナーしか経験していないので、今回の映画セミナーはいささか勝手が違い、すべてが異色で型破りに思えた。とにかく疲れた。肉体的にも、精神的にも。これがこのユニークなセミナーへの率直な感想である。

セミナー・ハウスのある多摩丘陵一帯では時空間が微妙に歪んでいるのではないだろうか。ときどきそう思えてならない。そうでなければ、なぜ、それまで見ず知らずであった学生時代に、あの二泊三日という短かいた間に十年来の知己の如く親しくなれるのか。また、どうしてもそんなに短かい時間にあれほどの充実感を覚え、セミナーの終了後にあれほどの疲労が残るのか。

大学共同セミナーの醍醐味は、何よりもこの充実の時間にあるのだと思う。正味四八時間という短い時間ではあるが、しかしこの時間は冬の朝のピンと張り詰めた空気のよう、絶えざる緊迫感で漲り、参加した学生を徹底的に打ちのめし、消耗させるのである。今回の映画セミナーはこの観点

昭和53年度第2回共同セミナー委員会

昭和53年11月10日(金) / 17時半~20時半 / 私学会館

別記一〇名の委員の出席の下に開催された第2回委員会は、昭和54年度年間計画の骨子を確認し、上半期(二回分)の企画をめぐって種々議論を行った。

とくに年間計画については、予想される文部省補助金額から試算した企画室案がほぼ了承された。共同セミナーの実施回数を五~六回、一回の参加者数を約七〇名としたもので、とくに参加者数については、反響の大きいセミナーでは一〇〇名を超える応募者がある

が、「共同セミナーなら何でも」といった常連の参加者を多少制限することに連つて、セクション演習の人数を一五名程度におさえ、

から考える限り、私の経験した中では最も衝撃的なセミナーであった。チャップリンの映画あり、淀川先生の講演ありという、多彩な(幾分、忙しすぎる)プログラムもよかったが、それ以上にセクション演習での学生の燃え方が素晴らしく、私のいたDセクションでは「笑い」の本質を考へるために、グループに分かれて夜半まで喜劇の製作に熱中し、厚かましくも、その一つを全体集会で上演した。とにかく燃えに燃えて、一杯に生きた二泊三日であった。長かった就職戦線から解放されたこの多摩の丘に、ひとときの憩いを求めようと、軽い気持ちで参加した私ではあったが、この映画セミナーはその私の期待を見事に裏切ってくれた。
(早稲田大学政経学部4年)

当ハウスのセミナーの本領を發揮すべきであること、また、学部教育(とくに一般教育)の補完を目的としてきた大学共同セミナーは、今日の大学問題が大学院を包み込んでいる現状認識に立って、参加者の質の向上を配慮する、といった理由によるものである。

なお、二泊三日の学生参加経費を、現行七、〇〇〇円から七、八〇〇円に引き上げることが承認された。

【出席委員】(敬称略)

- 岡宏子、谷口汎邦、山岸健、黒田道雄、佐竹寛、藤村瞬一、村田勝彦、熊坂敦子、小池滋、高須裕三

● 事業部だより

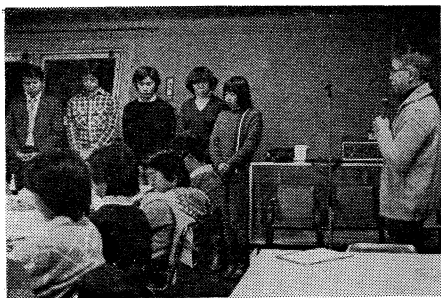
● 12・1月の利用状況

12月 井戸さらい等施設の整備で前半四日間、また後半には年末の休館で四日間、計八日間施設の回転が停止し、「稼働日数」は二日であった。このことからすれば、本年度9月に次いで二番目に多いゼミ回数の一〇八も、宿泊延人数の三、五八〇人も、この月の活況ぶりを示す数字である。

1月 今月も各大学の学年末試験の迫る時期と本格的な冬期とが重なって顕著な減少を示し、ゼミ回数七九、宿泊延人数一、五七八人に終わった。

● 12月の利用グループから

この月は利用グループ一〇八のうち会員校が八五と圧倒的多数を占めている。卒論および修論の中間発表・討論などを目的とする合



都留春夫ICU教授から祝福される成人式を迎えた学生達

宿が多いのが特徴である。上智大・高野雄一、早大・鈴木二郎、立大・大橋泰二、法大・松崎義各教授のゼミはそれぞれこの月二回ずつの利用である。杉野女子大・田村院司教授は今年も年末28日までの八日間、長期研修で恒例の「教育原理ゼミ」を実施された。
大学英語教育学会(JACET)でおなじみの慶大・小池生夫助教は「留学生を交えての英語ゼミナー」で当ハウスを活用された。このゼミナーには三六名の日本人と韓国、香港、カナダ、米国からの留学生八名が参加していた。日本人学生の一人岩下順子さん(経済学部三年)は、「現代の世界において、いかなる国も他の国の存在他の国との友好なしでは生き残ることは不可能です。そしてこの国家レベルの友好を促進する基礎として、私達は各国学生の交換と親睦というパーソナルなレベルでの交流を不可欠と考えます。今回私達は、この自然環境に恵まれたゼミナー・ハウスで、たとえ小さな友好の輪でもつくり上げることができ、感無量です」と感想を寄せた。また米国のアール・オダ君(日本語学科)も「この生活体験を次のように語ってくれた。
「I honestly believe that the seminar house is an ideal place to conduct a seminar as we did, or any other kind of social event. I wholeheartedly support its purpose. I especially liked the after-dinner program where each group were allowed to participate and provide some form of entertainment.

I only wish that we could have stayed a little longer so I could get to know better my newly made friends.」
12月16日の夕食時に行われた交歓会には、第15回大学教員懇談会を含む一〇グループ、二四大学からの教授と学生計二五二名が参加したので、広い食堂も超満員となった。同懇談会の講演者ロンドン大のデイビッド・マーチン教授が別掲のスピーチを述べ、前記「留学生を交えての英語ゼミナー」に参加の韓国と香港の学生がそれぞれお国の歌を披露してくれた。
クリスマスは25日と翌26日には「現代における宗教の役割研究会」の第16回研究会が「現代ニヒリズムと宗教」をテーマに、各宗教・宗派を超えた多彩な指導者約四〇名を集めて開催され、当ハウスにもご縁の深い西谷啓治京大名誉教授、中川秀恭国際基督教大学長、飯坂良明学習院大教授等が講演者やパネリストとして参加された。同研究会の当ハウスでの開催は今回が初めてであるが、国際ゼミナール館が新たに追加されたこと、また同会議の直後に東京都内で「国際宗教社会学会」が予定されたことなどが契機となって、八王子開催が実現した。閉会に際し、飯田館長は全参加者を交友館サロンドのお茶に招待した。

● 1月の利用グループから

一九七九年の初利用グループは新年仕事始めの5日午後に入館の四グループ―東大教養学科・内田ゼミの学生三名の自主合宿、駒澤大・電気美術研究部の一四名、清泉女子大・磯見ゼミ一九名(磯見辰典教授は引続き上智大のゼミ

協力団体 催し物案内

◆日加修好五〇周年記念日加会議「日本・カナダ関係の展開」主催日本カナダ学会

期日 昭和三十九年8月31日(於大学ゼミナー・ハウス) / 9月3日(於朝日講堂)

【基調講演】

前対外経済問題担当大臣

牛場信彦氏

ヨーク大学教授

J・セイウエル氏

【各セッションのテーマ】

カナダ史の特質を探る/日加関係の展開/カナダ社会と文学/カナダ日本人移民の歴史と態様/国際開発と日加協力など。

【主な報告者・パネラー】

G・R・クック(ヨーク大教授)、大原祐子(東大助教)、小浪充(東大教授)、C・パウリス(トロント大教授)、本間長世(東大教授)、大来佐武郎(日本経済研究所長)、

を指導された)、そしてスイス文学研究会の八名であった。

新春恒例の東京神学大主催の教職ゼミナーが全国の教職者・院生など七四名を集め、9日から二泊三日で開催された。10日の午後には竹森満佐一学長、大木英夫教授をはじめ参加者全員を交友館でのティーパーティに招待し、交歓のひとつきを過ごした。

● 暮と正月の諸行事

例年のように12月から1月にかけては、利用者の生活の中に組み入れられた季節の行事がいくつつか

武山泰雄(日経新聞主筆)、K・J・ヘイ(カールトン大教授)の諸氏はか多数。

【運営委員】

近藤晋一(日加協会会長)、馬場伸也(日本カナダ学会会長)、竹中豊(文化学院講師)の諸氏はか五名。

▼申込み・問い合わせは

津田塾大学国際関係学科内日加会議事務局(小平市津田町一四九二) / 電〇四二一三二一四一―二四四一内線六七・五一)

◆第31回日米学生会議

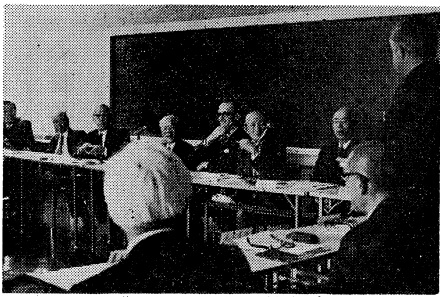
総合テーマ「相互理解に向けて」期日 昭和三十九年7月26日(8月18日) / 開催地 東京、広島、大阪、岡山

募集人員 三〇名、応募資格 大学学部、大学院、短大、高専、専門学校の学生、応募締切 4月25日 / 参加費用 約八万円、選考試験 4月下旬(5月上旬)に各地で実施

▼問い合わせは

財国際教育振興会内日米学生会議事務局(新宿区四谷一―二一) / 電〇三三三九九一六六二、内線六六)

技術に関するゼミナール)が当ハウスで開催された。参加者は都道府県岳連の海外担当者、一九七八・七九年度の海外登山隊代表者など国際的な「山男」九四名で、第17次南極観測越冬隊長をつとめた電通大・芳野越夫教授(千人会員)も「ヒマラヤの気象」について講演された。



現代における宗教の役割研究会
——西谷博士を座長とした宗教セミナー

行われているので点描してみたい。まず12月23日、週末の夕食のひととき、食堂でクリスマスに因んだ交歓会が行われた。当夜の在泊は、一三グループ、一〇大学の一八九名。すでにこの集いの常連となった前記杉野女子大・田村ゼミ、東京理科大・大沢ゼミのほか、今年はこの催しのある日を選んで利用の申込みをされた工学院大・麦島ゼミのグループもあつた。食堂のスタッフが腕をふるった料理で立食パーティのあと、各グループの紹介。つづいて交歓プログラムに入り、有志の学生や指導教授からトランペット独奏、合唱、独唱などが披露された。この夜のハイライトはリコーダーの合奏とそれに合わせた独唱で、これは去る8月当ハウスでリコーダー・ゼミナールを実施した東京リコーダー協会の川津隆幸氏他四名のスタッフの応援参加によるもの。ポピュラーからバッハのカンタータまで、この楽器独特の音色がクリスマス夜の夜にふさわしい雰

囲気をもり上げて下さった。最後にキャンドル・サービスを行い、各グループ代表のかかげる燈火が東京理科大・大沢潤一郎教授の親火を囲んで輪になる中で、聖書のことばを聞き、静思のひとときを持った。なお、在泊者から寄せられたクリスマス献金二二、二〇〇円は今年も重症身心障害児の施設・島田養育園に届けられた。次いで27日には、年の暮れの定例行事餅つき大会が構内の民家・遠来荘で行われた。今回も昼食時に合わせて行われ、在泊者は先ず食堂で第一コースの年越しうどんで腹ごしらえをしてから、餅つき会場へ足を運んで。今年もおだやかな日中に恵まれ、在泊者は昔ながらの年の瀬の情緒を味わいながら、野外での交歓のひとときを過ごした。なお、千人会員の神保信一(明学大)、土方保(専修大)、松崎義徳(U研究室)の各氏やご家族など二〇名もこの催しに参加して下さい。

ご用納めの昼食時には、例年のように食堂のスタッフが中心となって年越し昼食会が立食形式で行われ、年末の常連となった四グループ九五名が、それぞれ「出しもの」を披露したあと、「ほたるの光」で、一年後の再会を約した。年明けて、雪の降った1月13日(土)の夕食時には、在泊の七グループ一〇九名が一室に会して、二日後に「成人式」を迎える若人を祝福する恒例の「成人の日交歓会」を行った。今年はこの週末に共同セミナーが実施されなかったため、その数は例年ほど多くなかったが、玉川大農学部・若槻ゼミ、都立大人文学部・中本ゼミの参加

High Lands, High Thinking—Home Away From Home

This is the first time I have ever been able to speak to members of twenty-four universities at the same time. That fact indicates what a unique institution we are privileged to enjoy.

We deeply appreciate the generosity of our Japanese hosts in bringing us here—home away from home. It is very pleasant to have the whole household abroad, specially at Christmas, the time of family festival. You have provided us with a splendid context for the festival: food and the friendship of a world-wide family.

You also provide a festival of the intelligence, a feast for the mind: information, explanation, interpretation. This house is beautifully placed in the hills to help our thinking to be high: high thinking is part of your motto. Indeed in your motto you draw upon Wordsworth, and he was a poet of the English hills. He said hills and woods teach us more about life than all the sages can.

Earlier this year I was with my family teaching in Aspen, Colorado, in the American Rocky Mountains. This place and Aspen are exactly alike in providing feasts of the mind and of music in the hills. In my country we too have such places, one in a park by Windsor Castle, another in the Welsh mountains. Clearly we are all united in believing that intellectual feasts are best located in the beneficent surroundings donated by nature. We should try to create a world-wide circle of such places.

David A. Martin
London School of Economics
and Political Science,
Univ. of London

(昭和53年12月16日 夕食交歓会でのスピーチより)

学生でこのたび成人となる男子三名、女子二名のいることが確認できたので、今春も当ハウス方式の成人式を続けることができた。参加者一同の暖い拍手に促されて正面に並んだ前記五名に、国際基督教大・都留春夫教授からはなむけの言葉が贈られ、また当ハウスからは記念品が手渡された。

交友館カウンターから

交友館キリンサロンが昨年五月にオープンしてからほとんど休館日なくご利用頂き、はやくも九月を経過しました。

セミナー・ハウスにとつては念願していたサロンではありませんが、何しろ全くの素人の職員ばかりですから、無我夢中でこのキャンプスにふさわしいサロンとしての雰囲気をつくることに努力してきました。そこには品位があり、

また集う楽しさがなければなりません。それと共に経営のことを考へると赤字だけはさけたいということで、街の喫茶店とはちがった意味のもてなし方を模索しながらスタートしました。利用されるお客さんは当初の予想をはるかに上回わり、ことに昨年の夏は大変な炎暑でしたから冷房のあるサロンに涼を求める人々で連日盛況でした。うれしい悲鳴をあげるとはこういうことでしょうか。

ゼミのコンパにも好評ですが、各種の研修会や学会の懇親パーティ、お別れパーティなどが催され、文字どおり交歓の広場としての役割を果たしています。ホスピタリティの化身のような館長は、多忙なご日程の中にも千人会の先生方を朝食会にご招待されたり、ゼミの学生達をコーヒールームに招かれたりして人との出会いを大切にされています。このサロンの自慢の一つは、キャンパスの中心に建っていることと、景勝の場所にあることです。大きなガラス窓を通して四季折々の自然の変化が見られます。澄みきった冬空には丹沢の連山、白雪の富士が美しく、また夕焼空に映える赤富士などの眺望がサロンの額になっています。もう一つご紹介したいことは、スタッフ一同チームワークのよいことです。「ご家族ですか」などと問われることがあります。職員が中心になっていますが、家庭婦人のパート、学生アルバイトの強力な応援をうけています。幸い学生達は職員宿舎の住人ですし、パーティの奥さんも隣人ですから忙しい時に一声かけると、すぐにかけてくれます。今日までこの交友館づくりに工夫をこらし頑張っ

●館長日記から

今年から早春のキャンパスの風景の中に水仙が新しく加わった。昨年の秋、英文学者齋藤勇先生が多年愛育され観賞された水仙の球根を大量に分けて下さったものである。春の香をおわず沈下花とともに、また寒梅とともに水仙の花が美しく静かに咲いている。◆11月10日の斎藤先生のおはがきに「先日は御来訪多謝。水仙の芽がいたんだのはあるまいかと少々心配です」とあり、つづいて1月18日付には「水仙の花が咲いているとのこと、ひと安心しました。出かけた芽が折れはしなかったかと気になっていたので。来年は倍にふえましょう。三年か四年目に掘りおこし、根分けして下さい。そのときは東京女子大にもあげて下さい」とある。まさに水仙を他家にとつがせた気持が先生の心境らしい。英詩・水仙・斎藤という連想には、自然と人間、そして生命と愛を思わせるものがある。◆1月13日、私は六九歳の誕生日に慶応院の手術台に横たわっていた。昨秋人間ドックで発見した胃のポリプをとるためである。切開せずに、二・五センチの肉塊を見事に胃袋から切りとることができたのは幸わせた。一カ月の入院を覚悟していたが、出血もなく、経過良好で早々に退院し、自宅で静養した。天恵の休暇というべきか。◆2月17日、ギリシャ語研究八八年の元東京女子大教授玉川直重先生の葬儀が柏木教会で行われた。私にとっては最も古い最良の友人であり、人生の先輩であった。貧しいのに早くから千人会員になっておられた。昨年4月に完成出版された「新約聖書ギリシャ語辞典」は先生のライフワークであった。◆2月24日、エスター・B・ローズ女史の告別式が普連土学園で行われた。ミス・ローズは我々クエーカー教徒の間では親愛の存在であった。大正七年、フレンド派の宣教師として日本に来られフレンド女学校として英語教師となられたのである。女史は終戦後、ララ救済物資在日代表として活躍されたから、ひどい栄養失調の時代に、日本および日本人を助けてくれた恩人でもある。また皇太子さまの英語の教師をされたたり、学校と教会、そして世界の奉仕活動に八二年の生涯を献けられた。私は昭和48年10月、フィラデルフィアのローズ邸の客となった。紅葉が落ち始めた頃なので、その美しさは壮大であった。親しい人々と自宅で晚餐を共にし、その夜心臓マヒで静かに永眠されたという。羨望に堪えない人生のフィナーレである。◆2月27日、学習院大学教授小泉一郎氏夫妻の招きをうけ水戸偕楽園の梅花を観る。一夜の客となり歓をつくした。◆東大助教教授杉山好氏のご好意で、3月8日、東独ドレスデン十字架合唱団によるベッハのミサ曲短調を渋谷公会堂で聴いた。七五〇年の伝統が現代に生きていた。非凡という外はない。



くれた学生六名の中、めでたく三名が卒業されますが、熟練スタッフを失うのは大変残念なことです。当ハウスには交友館を考える委員会がありまして各部の職員の熱意とご協力のもとに今日に至っています。宿泊される方のご要望に応えるようスタッフ一同努力を重ねていきますから、利用者の皆様も是非勉強の合間には、おくつろぎにおいて下さい。特注があればダイナーの席も設けます。

疲れを癒すために、または対話がはずむように夜間は六時よりアルコール類も用意しています。しかし、他のグループが一緒だったり、附近のセミナー室では勉強してお互いに迷惑をかけることですから、お互いに迷惑をかけることなく利用の方々が気を遣って下さることが大切です。千人会員・東京ニューズ会長、小俣喜久治氏のご好意で、四季にちなんだ立派な書画がサロンの壁面を飾っています。私共職員も花瓶や水盤に花をいけることにつとめています。一見して交友館のサ

●第一〇二回大学共同セミナー——近代

主 題 学問の移植と創造——近代日本の場合
期 日 昭和54年5月25日〜27日
△全体講義▽
△追悼記念講演▽
東京大学教授 今道友信氏
日本の数学の発展と正田さんのお仕事
東京大学名誉教授 弥永昌吉氏

●利用状況

Table with columns for dates (12月, 12月11-13日, 12月15-17日) and lists of university names and professors.

Table with columns for university names and professor names, listing participants for the seminar.

